

先に述べたように、本書でとられた手法と実証が人類学や社会学の理論に対してなした貢献について、評者は評価をする能力をもたない。本書はタイ研究者だけでなく、こうした方法論に関心のある読者からも評論されるべき労作と考える。

(重富真一・アジア経済研究所)

伊藤正子、『戦争記憶の政治学——韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』
平凡社, 2013, 292p.

本書を一読してまず感服したのは、ベトナム研究の専門家である筆者がよくぞここまで韓国のことを調べあげて、ベトナム戦争の記憶をめぐる韓越比較研究を立派に成し遂げたことである。韓国軍のベトナム戦争参戦の記憶については金賢娥著・安田敏朗訳『戦争の記憶 記憶の戦争 韓国人のベトナム戦争』（三元社, 2009 年）などの先行研究があるが、本書はそれらに依拠しつつさらに深めており、2009 年以降の韓国における「国家有功者」顕彰や「ベトナム参戦碑」建立の動きもきちんとフォローしていて、非常に勉強になった。東アジアにおいて相互の「戦争の記憶」を冷静に突き合せていく調査・研究がまさに必要とされている今、本書はベトナム現代史研究のみならず、東アジア現代史研究の大きな成果だと評価できる。さらに感服させられたのは、筆者も「日本の嫌韓右翼に利用されて、『あげあし』をとられる可能性もある」（p. 12）と述べているように政治的に非常に微妙なテーマに取り組んだ勇気である。私もベトナム戦争の「戦争の記憶」の聞き取り調査をしているが、率直に言って、本書のテーマは自分の手に余るものと敬遠してきた。筆者は日韓両国の過激な言辭に惑わされることなく、「韓国の NGO や個人など民間の地道な活動が、虐殺を生き延びたベトナムの人たちの心を解きほぐし、記憶を捻じ曲げたり誤魔化したり過去にフタをすることによってではなく、記憶を新たにすることで、赦しと和解が生まれていく過程」（p. 228）を見事に描き、こうした活動こそ、「実は被害者であるベトナムの人々との真の和解を成し遂げることにつながっていることを、分裂したままの世論を抱える

韓国社会に、第三者の立場から訴える」（p. 228）とする姿勢を貫き通した。この点は筆者に対しおおいに敬意を表したい。

本書で扱っているベトナム戦争の記憶は、韓国軍によるベトナム民間人虐殺事件の記憶である。いうまでもなくベトナム人にとってのベトナム戦争の記憶は、虐殺事件の記憶ばかりではなく「戦闘の記憶」や「北爆の記憶」などもあり、虐殺事件の記憶だけですべてを語ることはできない。筆者は、ベトナムが現在、「戦争の記憶」をナショナリズムの中核におこうとしていない（p. 202）とするが、虐殺事件の記憶の議論からだけでは直ちには一般化できないのではないだろうか。一方、筆者も指摘しているように虐殺事件の記憶は「公定記憶」の周縁的存在とされている。この点は爆撃の被害者などの民間戦争被害者の記憶と共通している[今井 2013a]。これらの人々は「有功者」とはされておらず、補償の対象ともされていない取り残された存在である。国家において虐殺事件の記憶は、戦争中・戦争直後においては怨みを掻き立てて敵愾心を高揚させ、敵国を告発することに意味があり、実際、ベトナムでは虐殺現場や爆撃被災現場などに「憎悪碑」「怨みの碑」あるいは「復讐碑」が多数つくられている。戦後になると、かつての敵国との関係正常化における和解過程を象徴することに意味の重点が転じ、事実の究明や虐殺の生き残りの人々の意向はなおざりにされる傾向にある。「公定記憶」からは零れ落ちてしまうこういった「戦争の記憶」を掬い上げたことは本書の功績であろう。

私は虐殺事件の直接的な聞き取り調査をしたことはないが、本書を読みながら虐殺事件の聞き取り調査の困難さと調査者の立ち位置について考えさせられた。お線香を携帯しながら聞き取り調査をしたとの筆者の記述が非常に印象的であった。韓国人のク・スジョンや金賢娥、さらには筆者の虐殺の生き残りの人々へのインタビューがうまくいったのは、彼女たちとインタビューーとの「互いの痛み心に心をさせる交流」（p. 114）が深化しえたことに主に起因するであろうが、インタビューアが女性であったことも大きかったのではないかとの感想も抱いた。これが虐殺した兵士を彷彿

とさせるような男性であつたら、はたしてどうであつたろうか。また虐殺の生き残りの方が語った「韓国人が来たらインタビューには絶対答えない。日本人が来たと聞いたからここに來たのだ」(p. 135)との発言には、虐殺事件の聞き取り調査における第三国研究者の意義・役割をあらためて考えさせられた。

虐殺事件の記憶に対する地方ごと、あるいは地方レベル別(村、社、県、省)での扱いの違いや、アメリカ軍による虐殺事件(ソンミ村)と韓国軍による虐殺事件の対応への違いを明らかにした点も本書の功績であろう。虐殺にはレイプやさらには混血児誕生といった現象が随伴することが多いが、本書では「ライダイハン(韓国人との混血児)」の問題には触れられていない。この問題はネット上や週刊誌などではセンセーショナルに取り上げられているが、私の個人的印象ではベトナム国内でそれほど大きな問題とはされていない。この問題が本書ではなぜ言及されなかったのか、調査上の理由なのか、そもそもこういった問題はあまり存在しないのか、一部の人々の関心が高いだけに現地調査経験の豊富な筆者の説明が欲しかった。

外交・経済関係への影響を配慮した「過去にフタをして、未来へ向かおう」というベトナム国家が出している方針について筆者の批判は鋭い。この方針がベトナムの記憶の語り方を管理・統制しているのではないだろうか(p. 77)との筆者の見解は私にとってはきわめて斬新であった。一見、未来志向のスローガンのように聞こえるが、実は必ずしもそうではなく、むしろ国民の記憶の統制に利用されることによって、真の和解の障害となっているとの指摘には目を開かされた。私自身のクアンガイ省やハノイでのクリスマス爆撃(1972年)の被害者への聞き取り調査の経験からすると、この方針についてベトナム人の意見は、「人々に愛国心、勇敢さや怨む心があつたので戦争に勝利することができたのであるから怨む心を忘れるべきではない」という意見と、「怨みを鎮め、過去のことを暴き立てることはしないで、忘却しない程度にとどめるべきだ」との意見に分かれていた[今井 2013b: 65]。しかしいずれの意見も記

憶を忘却・抹消すべきだとは言っていない。さまざまな事情で「過去にフタをする」ものの、抹消するわけではなく、ハミ村の事例にみられるようにフタをされても記憶はひそかに保持していくという面には私はより着目していきたい。いざという時にはフタは開かれるのである。ハミ村でベトナム政府が虐殺の記憶を管理・統制したのはこのスローガンそのものによるものというよりは、経済援助を背景にした政治的压力・利権がらみの問題であり、このスローガンを「人々が個人の歴史を語る自由を末端レベルのみに押さえ込もうとする」(p. 74)主犯扱いするのは酷なような気がする。

本書では、韓国の「記憶の闘争」状況とベトナムの「記憶の統制」状況が対照的に示され、ベトナムには記憶の「闘争」の余地がないとされている(p. 74)。確かにベトナムの「戦争の記憶」における国家の専有状況は強国であるが、まったく「闘争」がないかというところでもない。違つかたちの「闘争」がある。それは「公定記憶」の範囲内での戦功を競う意味での「闘争」である。これは「有功者」だとされると種々の優遇が受けられ、実利とも関わってくるので、意外と熾烈である。有名なものとしては、1975年4月30日に旧南ベトナム大統領官邸に最初に突入した戦車はいずれの戦車かという戦功を競う論争があつた。しかし「公定記憶」と対立するような「対抗記憶」が国内で公然と存在しつづけることは難しい状況にあることは確かである。では、「ベトナム国家の公定記憶になりえないハミ村の虐殺」(p. 126)やあるいは筆者の表現では「国家に見捨てられた記憶」「残余の記憶」などは、どのように存在していくのであろうか。筆者は、韓国のNGOがベトナムの「余った記憶」「残余の記憶」を掘り上げ、記憶の当事者たちの癒しに貢献し、国家に包摂されない戦争の多様な記憶を維持し(p. 209)、かれらが外部者として別の回路で記述・記憶しつづけているとも言える、としている。では、ベトナム国内でそのような記憶を保持していく可能性はないのであろうか。筆者はまた「韓国の市民運動との交流を通じて、ベトナム国家の『公定の歴史』に必ずしもしばられず自由に思考する若い知識階級層がベトナムにも生まれていることを示している」(p.

40) と述べ、ベトナムにも新しい芽が出てきていることも指摘している。ベトナム国内の現状では「公定記憶」に反対・対立するような「対抗記憶」が公然化することはなかなか困難であるが、対立・反対しないまでも「公定記憶」からはみ出るような記憶をも紡いでいこうとする動きもみられる。私はその例としてハノイ市にある民間の博物館「捕虜となった革命戦士博物館」の活動を取りあげて「戦争の記憶の社会化」と規定し、「記憶の統制」といった面だけではない、ベトナムにおける戦争の記憶の多様な現状を捉えようと試みた[今井 2014]。

最後に、「戦争の記憶」という本書の主題からは逸脱して恐縮であるが、私が抱いた一つの疑問を提出させていただきたい。私は南ベトナム解放民族戦線がはたしてどれ程、南ベトナムにおける戦闘主体であったのかという問題にこだわりをもって、ベトナム戦争研究に携わってきた。本書では、南ベトナムでのいわゆる「解放勢力」の戦闘主体は同戦線だと捉えられており、たとえばある社の元党書記がインタビューで「1971 年に解放民族戦線に入り」と語ったとされている (p.120)。私の聞き取り調査の経験では「解放勢力」側の人たちの語りでは解放戦線が表に出てくることは少なく、こうした場合は「革命に参加する」という言い方がほとんどである。この点を疑問に思い、筆者の解放戦線の捉え方に若干の違和感を覚えたことを指摘して、本稿を閉じさせていただく。

(今井昭夫・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

参考文献

- 今井昭夫. 2013a. 「1972 年クリスマス爆撃の記憶——ベトナム・ハノイ市カムティエン通りの被災者への聞き取り調査」『東京外国語大学論集』86: 225-242.
- . 2013b. 「ベトナムにおける抗米救国抗戦の記憶——ベトナム国内・退役軍人たちの聞きとり調査からの素描」『東京外大 東南アジア学』18: 55-70.
- . 2014. 「ベトナムにおける戦争の記憶の『社会化』——『捕虜となった革命戦士博物館』

の事例を通して」『地域研究』14(2): 112-125.

西村昌也. 『ベトナムの考古・古代学』同成社, 2011, 360p.

本書は第 10 回 (2012 年度) 東南アジア史学会賞を受賞している。よって、一定のゆるぎない評価が定まっているといえよう。ところが 2013 年 6 月、本書の著者は不慮の事故によって帰らぬ人となってしまった。そのため本書は、著者の遺言のような意味を帯びることとなった。本稿では本書を再読し、著者の業績を回顧する機会としたい。

本書の構成は以下の通りである。旧石器時代から前世紀までを含む、壮大なスケールの北部ベトナム史である。

- 第 1 章 北部ベトナムの地理的趨勢——北部ベトナムと紅河平野について
- 第 2 章 旧石器時代から続旧石器時代——長く続いた礫石器伝統と洞穴貝塚の出現
- 第 3 章 前期新石器時代——開地遺跡と大型貝塚出現が示す定住化の過程
- 第 4 章 後期新石器時代——長期安定居住や集団墓が示す定住農耕集落社会の形成
- 第 5 章 金属器時代——青銅器製作伝統の始まりと銅鼓の出現
- 第 6 章 コーロア城——ベトナム史上最初の大型城郭遺跡の魅力
- 第 7 章 初期歴史時代前期 (紀元 1 世紀半ばから 3 世紀初頭)——在地化する中国の伝統と周縁化した在地伝統
- 第 8 章 ルンケー城の研究——初期歴史時代前・中期の中心城郭“龍編”の実態
- 第 9 章 初期歴史時代中期・後期素描——根付いていく仏教と中国文化
- 第 10 章 タンロン城前史初探——複雑な安南都護府時代あるいはその前身
- 第 11 章 独立初期王朝時代から李・陳朝期——ベトナムの基本が作られた 10～14 世紀
- 第 12 章 胡朝・黎朝初期 (15 世紀) 以降——現代ベトナムに直結する景観や文化が形成される時代